

東大現代文解説

Anchor

平成27年度 第一問

収録

ver. 1.5



初めに.....	3
現代文とは何か？	3
Anchorとは何か？	3
この教材自体を疑うこと	4
議論すること	4
Anchorに関するお問い合わせ	5
平成27年度 第1問	7
解答例	7
本文解説.....	7
設問解説.....	11
設問（一）	12
設問（二）	18
設問（三）	22
設問（四）	26
設問（五）	31
最後に	46
引用文献・著作権表示.....	48

初めに

現代文とは何か？

受験科目としての現代文とは、与えられた文章（問題文）を、論理的に読解し、問題に対して適切な表現で応答する能力を測る科目である。実は東京大学もこの定義と同様の方針を表明している¹。この意味で、現代文という受験科目は非常に特殊なゲームであり、一般的な意味における「文章を読むこと」や「文章を書くこと」とは性質が異なるものだと考えて欲しい。それゆえ、ただ読書してみたり、ただ文章を書いてみても、現代文の点数はなかなか上がらない（もちろん、やらないよりはましであるが）。

この「与えられた文章（問題文）を、論理的に読解し、問題に対して適切な表現で応答する」という定義の要点は二つある。

一つは、必ず問題文に根拠を求めなければならないということだ。言い換えれば、問題文に書かれていない専門知識だけを根拠とした読解をしたり、自分独自の主義主張を展開したりしても、それは全く評価されないということである。この点で、一般的な文章に対する論評とは異なる。また、問題文に根拠を求めるということは、筆者が何を伝えたいかに縛られる必要は無いということでもある。筆者が伝えようとはしていなかったが問題文に表現されてしまった事柄は読解する必要があるが、逆に筆者が伝えなかったが問題文で表現されていない事柄は無理に汲み取る必要は無い。私たちが対峙すべきはあくまで問題文であり、筆者ではない。

もう一つの要点は、論理的でなければならないということだ。論理的に考えるだけが、現代文の妥当な解答へと向かう道である。そこに閃きや専門知識は全く必要無い。問題文に向き合い、丁寧に論理を重ねていけば必ず攻略できるはずだ。

Anchorとは何か？

この教材（Anchor）は東京大学の現代文の入学試験について解説しその解答例を提示しているものである。Anchorは大きく分けると、＜虎の巻＞と＜各年度問題解説＞から成り立っている。＜虎の巻＞では、各年度の問題に共通して通用する方法

¹ このことについてはこの章の最後にコラムとして記述している。

論について説明している。＜各年度問題解説＞では、各年度の問題について個別に解説し解答例を提示している。もちろん、可能な限り＜各年度問題解説＞だけを読んでも解説が成立するようには努めてはいるが、できるだけ＜虎の巻＞を参照してから、＜各年度問題解説＞を読むようにしてほしい。当たり前だが、実際に受験会場で対峙するのは、過去問ではなく未知の問題である。過去問を個別に対策しても、それは入学試験の対策をしたことには全くなならない。そして何より、将来の糧ともならない。過去問から何を学び、それを自分の力とすることが重要である。

この教材自体を疑うこと

多少逆説的に聞こえるかもしれないが、この教材自体を疑うことも非常に大事なことである。私たちはこの教材で解説を行い解答例を提示するが、私たちが言うことが全て絶対的に正しいわけではない。文章を読み解く方向性は必ずしも一つに収束しないし、また、同じ方向性においても、より緻密で精緻な読解・解答というのは常に存在し続ける。よって、この教材から学びつつ、同時にいつもこの教材を上回ることを目指すことが最も大切である。繰り返すが、実際に受験会場で対峙するのは、過去問ではなく未知の問題である。受験会場には普段教えてくれている先生はいないし、このAnchorも無い。自分自身の力でより良い解答を模索する気概と能力を身につけてくれたら嬉しい。

議論すること

受験問題自体、そしてこの教材の内容について議論することもとても大事だ。一人では見えなかったことも、他の人と議論する中で見えてくるものである。また、そもそも、先ほども述べた通り、読解の方向性は一様では無いのだから、様々な読みを認識すること自体が貴重な財産となるのである。実際、Anchorの執筆者も複数人おり、それぞれがつくった答案を突き合わせて、相互に批評しあいながらよいよい答案を練り上げてきた。

勿論、このAnchorを作った私たちに対する議論も歓迎である。可能な限り対応するので、いつでも気軽に議論を申し込んで欲しい。

ただし、読みには妥当性が必要であるということは注意として付け加えておきたい。読解の方向性は多様であり、また様々な人との議論が大切であるとは言っても、妥当性の低い読みというのはある。やはり、読み解く文章が指定されている以上、その文章の中に根拠があることが大事である。もちろん、論理性を欠いてもいけな

い。時折見られるような、解答に必要な要素をただ連ねただけで、論理のつながりを無視した文章もいけない。「現代文」という科目はそういうゲームなのである。読解は多様ではあるが、何でもありでは無い。多様性を認めつつ、妥当性を見極める力を身につけることが大切である。

Anchorに関するお問い合わせ

Anchorに関するお問い合わせは、 Webサイト、Twitter、LINE@にてお受けしております。

- ▶ Schip 公式Webサイト <https://schip.me>
- ▶ Twitter @schip__ https://twitter.com/schip__
- ▶ LINE@は以下のQRコードより友達登録をお願いします。



コラム：東京大学の考える「現代文」

東京大学がWebページで公開している「高等学校段階までの学習で身につけてほしいこと」という文章を読むことで、東京大学がどんな能力を測ろうとしているのかを推し量ることができる。そこでは「文章を筋道立てて読みとる読解力」「それを正しく明確な日本語によって表す表現力」の二つが中核として記述されている。このような東京大学の示す方針はAnchorにおける現代文の定義と相違ない。少し長くなるが、以下に全文を引用する。

(引用元：http://www.u-tokyo.ac.jp/stu03/e01_01_18_j.html)

(アクセス：2016年12月25日)

国語の入試問題は、「自国の歴史や文化に深い理解を示す」人材の育成という東京大学の教育理念に基づいて、高等学校までに培った国語の総合力を測ることを目的とし、文系・理系を問わず、現代文・古文・漢文という三分野すべてから出題されます。本学の教育・研究のすべてにわたって国語の能力が基盤となっていることは言をまちませんが、特に古典を必須としているのは、日本文化の歴史的形成への自覚を促し、真の教養を涵養するには古典が不可欠であると考えからです。このような観点から、問題文は論旨明快でありつつ、滋味深い、品格ある文章を厳選しています。学生が高等学校までの学習によって習得したものを基盤にしつつ、それに留まらず、自己の体験総体を媒介に考えることを求めているからです。本学に入学しようとする皆さんは、総合的な国語力を養うよう心掛けてください。

総合的な国語力の中心となるのは

1. 文章を筋道立てて読みとる読解力
2. それを正しく明確な日本語によって表す表現力

の二つであり、出題に当たっては、基本的な知識の習得は要求するものの、それは高等学校までの教育課程の範囲を出るものではなく、むしろ、それ以上に、自らの体験に基づいた主体的な国語の運用能力を重視します。

そのため、設問への解答は原則としてすべて記述式となっています。さらに、ある程度の長文によってまとめる能力を問う問題を必ず設けているのも、選択式の設問では測りがたい、国語による豊かな表現力を備えていることを期待するためです。(引用終わり)

平成27年度 第1問

——池上哲司『傍にあることー老いと介護の倫理学』——

難易度A

解答例

設問（一）	現在の自分に統合されることでのみ過去の自分は存在するので、過去の自分がそれ自体として独立に存在しているという前提は成立しないから。（65字）
設問（二）	ときに無意識に過去の経験を統合しつつ生成する自分の働きに対して、受け手である他者が認めた意味によって、自分らしさが現れてくるから。（65字）
設問（三）	他人から認められた自分らしさは、生成の運動としての現在の自分らしさではなく、具体的行為として過去に現実化されたイメージの一つにすぎない、ということ。（69字）
設問（四）	死者の残した具体的行為に相対する他者は、死者の働きかけに応答しながら新たな意味を引き出せることを、まざまざと感じるということ。（63字）
設問（五）	多様な可能態としての自分らしさは、ときに無意識に過去の自分を統合しつつ生成する自分に含まれており、自分の生前死後を問わず、自分の残した具体的行為から他人によって引き出されるほか、自分のイメージから逸脱しようとするということによっても現象するということ。（119字）

本文解説

哲学的文章（運動するテキスト）の読み方

平成27年の東京大学の現代文、第一問は難問であった。この文章が難問である理由にはいくつかあるが、ポイントは一つに集約できる。すなわち、いったん主張されたことが撤回され、より厳密なかたちで言い直される、ということが頻発するという点である。

現代文の通常の文章であれば、本文を通して言いたいことは基本的に変わらない。というのも、筆者には「言いたいこと」が先にあり、その言いたいことをどう伝えるかを後から考え、再構成されてテキストがつくられているからだ。その場合、読者は、著者の導きにしがたって、「言いたいこと」を掴んでいけばよい。

しかし、哲学の文章だけは、そうではない。哲学の文章は「運動」している。テキストそれ自体が生き物なのだ。死んでしまったものをわかりやすく展示している博物館ではない。その生き物としてのテキストは、著者すらまだ分かっていないものを、言葉・論理・意味に忠実に、一步一步先に進めることで生み出される。それゆえ、読者もまた、筆者とともに、運動することを強いられる。それを無視して、テキストを静的なものだと見なして読解してしまうと、底なし沼にはまってしまう。「さっき言っていたことと違う」という異議申し立ては、哲学の文章には通用しないのである。

それでは、運動するテキストと向き合うためにはどうすればよいのか。著者の思考の流れにしがたって、「何が問われ」「何が暫定的に主張され」「何が反駁され」「なにが新しく主張され」「何が新たに問われているか」を捉えることが重要である。ある問いがあったとき、「一般的にはAと主張できるが、よくよく考えるとBである」というのが通常の文章である。哲学の文章の場合、「よくよく考えるとBであるが、もっとよくよく考えるとCである」といったように、論理が永遠に展開していく。その「よくよく考えると」の部分が論拠である。このように、哲学的なテキストでは、「問い」「根拠」「論理」「主張」がセットになりながら、テキストが運動する。

それゆえ、哲学的テキストにおいては、テキストの運動に沿って、形式段落をうまくまとめて意味段落をつくり、その意味段落ごとに内容をつかむのが非常に重要になる。とはいっても、そこまでは通常のテキストでも重要な工程である。哲学的テキストでは、さらに、意味段落間の関係をつかむという仕事が残っている。さきほど説明したように、意味段落ごとに言葉の定義さえ異なることがあるからである。そうして、やっとテキスト全体を俯瞰し、動的なテキストの動きそのものを理解できるようになるのである。

意味段落(1)=形式段落 1～2

形式段落1～2では、なにが問われているのだろうか。問いは冒頭に明確に明示されている。「昨日机に向かっていた自分と現在机に向かっている自分、両者の関係はどうなっているのだろうか」である。言い換えれば、「現在と過去の関係」が問われている。その問いへの最初に提出される暫定解が「過去の自分と現在の自分が別々にいる」というものである。しかし、これは反駁される。「過去の自分と現在の自分という二つの自分があるのではない。あるのは、今働いている自分ただ一つである」という文章である。その後、過去は現在に統合されるかたちでしか存在できないことが述べられている。これが、過去の自分が単独で存在しないことの根拠になる。これまでの展開をまとめてみよう。

【問い】 過去と自分の関係はどうなっているか？

【反駁された答え】 過去の自分と現在の自分が別々にいる。

【ここでの暫定解】 過去の自分は単独では存在せず、存在するのは現在の自分だけである。

【根拠】 過去の自分は現在の自分に統合されたかたちでしか存在できないから。

意味段落(2)＝形式段落3～5

次の話題にうつろう。ここでは、まず統合の意識という話になり、次に他者の話が続いてでてくる。いったい何が問われているのか。それが難しい。しかし、形式段落3の最後に、それまでの議論を受けるかたちで「自分の生成」「自分の自分らしさ」という鍵となる概念が出てくる。それは形式段落4にまで及ぶ。それゆえ、ここで問われているのは「自分の自分らしさとはなにか？」という問いになろう。

それを踏まえて改めて形式段落3に戻ると、まず「どの過去の自分を統合するかは意識的に選択できない」ことが主張される。さらに、「他者からの応答」も要素として加わってくることが主張される。形式段落4ではもっと強く、「自分の自分らしさは他者によって認められるという逆説」が語られる。

改めて、以上の点を考えると、「自分 \longleftrightarrow 他者」という対比が出てきて、他者によってこそ自分の自分らしさが決定される、というのがここでの筋になろう。ここまでをまとめてみる。

【問い】 自分の自分らしさとはなにか？

【反駁された答え】 自分の自分らしさは意識的に制御できる。

【ここでの暫定解】 自分の自分らしさは意識的に完全に制御できない

【根拠】現在の自分に統合されている過去の自分は完全に意識されているわけではない＋自分の自分らしさは他者によって認められる

さらに、この意味段落のなかだけではなく、前の意味段落との関わりを考えてみよう。前の意味段落では、現在の自分に過去の自分が統合されて自分となる、ということが言われていた。ここでは新しいファクターとして、自分 \leftrightarrow 他者ということがいわれている。すなわち、ここでは、前の論を含むかたちで新しいメタレベルの高いことが主張されている。それを図式化すると、以下のようになる。

【過去 \in 現在】＝自分 \rightarrow 他者

形式段落5では、分かりやすく、前に主張された暫定解が部分的に否定されている。「自分の自分らしさは他人によって認められるのであるが決定されるわけではない」という部分がそれである。ここは、前の段落の主張を部分的に否定してつくりなおし、より精緻なものにしていると考えられる。すなわち、以下のようになる。

【問い】自分の自分らしさとはなにか？

【反駁された答え】自分の自分らしさは他人によって決定される

【ここでの暫定解】自分の自分らしさは他人によって認められる

【根拠】自分らしさは生成の運動だから

意味段落(3)-1＝形式段落6

形式段落6では、自分らしさという生成の運動というものの方向性はなにか？という問いかけから始まっている。ここでは、「何か自分についての漠然としたイメージが具体化する」という主張が否定されている。その代わりに、「どれだけこれまでの自分を否定し、逸脱できるか」とおう「可能性」こそが方向性であることが主張される。

これまで、【過去 \leftrightarrow 現在】 【自分 \leftrightarrow 他者】という二項対立によって論が精緻化されてきたが、ここで持ちだされたのは【現実性 \leftrightarrow 可能性】という対である。あくまで、他人によって認められた自分の自分らしさも結局、これまでの現実に立脚した話でしかないという点が喝破される。他者には、自分の可能性を決定する力

まではない。あくまで、可能性が現実化したときに、それを「認める」ことができるだけだ、という主張である。

意味段落(3)-2＝形式段落 7～9

形式段落 7～9 では、形式段落 6 で主張された暫定解が部分的に否定されるところから始まる。可能性は死によって終止符を打たれるというのは、ほんとうか？という問いである。これに対して、著者は、生成・足跡・働き＝運動性という概念を区別して論じる。注意してほしいのは、生成と働きという概念が、ここで初めて明確に区別されたことだ。これまでは、生成も働きもそこまで区別されて用いられていない。ここで初めて区別される。なぜこの区別が必要になったか。それは、「働き＝運動性」というものを「生成」にばかり認めていたことを退け、「足跡」にも「働き＝運動性」がある、ということを主張せざるをえなくなったからである。

それでは、なぜ「足跡」にも「働き＝運動性」を認めなければならなかったのだろうか。それは、自分が死んだあと（生成という働きがなくなったあと）も、足跡にある働きが他者によって引き出されるからである。ここで「われわれの働きは徹頭徹尾他人との関係において成立し、他人によって引き出される」という強い主張がなされる。ここで密かに反駁されているのは、形式段落 6 で密かに主張されていた、生成という働きは、虚への志向性だから、他人は関係なく、自分で完結する、という主張である。そうではない。生成という働きすら、他人との関わりが必要なのだ。ここでは、そう主張しなおされている。そして、その他人の関わりによって引き出される可能性が、現在の自分に秘められている、ということである。

したがって、【現実性←→可能性】という対比にひそかに持ち込まれていた【他者←→自分】という対比が、ここでは反駁されている。可能性も他人によって引き出されるものなのだ。その繋がり根拠は、本文全体を視野にいれないと理解できない。設問解説の最後に、その点は詳しくみてみよう。最後の「この秘められた、可能性の自分に向かうのが、虚への志向性としての自分の方向性でもある」という一文に濃縮された、ここまでの筆者の思考の運動を納得いくまで理解できれば、やっとこの文章を読んだ価値があったというものだ。

設問解説

設問（一）

問題	「このような見方は出発点のところで誤っているのである」（傍線部ア）とあるが、なぜそういえるのか、説明せよ。
解答例	現在の自分に統合されることでのみ過去の自分は存在するので、過去の自分がそれ自体として独立に存在しているという前提は成立しないから。（65 字）
思考の目次	<p>構成フェーズ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「傍線部ア」がなぜそういえるのか、と問われたとき、どのように答えればいいのか？（なぜかとの違い） ・ 「Aが出発点のところで誤っている」理由は、どのような形式で答えられるか？ <p>読解フェーズ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ このような見方とはなにか？ ・ 出発点のところで誤っている理由はなにか？

構成フェーズ

まず、設問文の問いを確認しよう。設問文の問いは、「傍線部ア」は「なぜそういえるのか」である。この問いは、「傍線部ア」とあるが「なぜか」という問いとは異なっている。「なぜそういえるのか」とは、丁寧に言えば、「そのように言える可能性が存在している根拠」を述べることである（言えるとは、言うことができるという意味だから）。一方で、「傍線部ア」とあるが「なぜか」という問いは、「傍線部ア」が真であると主張できる論理的な（いつでも成り立つ）理由を説明すること、つまり「傍線部ア」を証明することを要求している。。ここでは、そこまで強くなく、「傍線部ア」という可能性が存在している根拠、言い換えれば、「傍線部ア」を支持する根拠が求められている。なお、以下この大問の解説では、このように「支持」と「証明」という二つの言葉をしっかりと区別して使う【→コラム：証明と支持】。

さて、「設問文」から「傍線部」に視線を移そう。傍線部は、「このような見方は出発点のところで誤っているのである」であった。ここで重要なのは「出発点のところで」である。出発点のところで誤るのは、途中で誤ったり、終点で誤るのとは違うのか。論理的に考えれば、出発点は前提、途中とは導出、終点とは結論である。というのも、論理学では、「前提から結論を導出する」という図式で考える

からである。それゆえ、ここでは、「傍線部アの前提がそもそも誤っている」可能性は、どのような根拠のもとに可能か、という点を指摘すれば構成として満点の解答になる。ここまでの成果をまとめて、本文の読解にうつるために、問いを立ててみよう。

「このような見方」が、前提から誤りである可能性は、どのような根拠によって支持されるか。

読解フェーズ

それでは、傍線部の意味を確認しよう。最初に、指示語が含まれている「このような見方」とは何かを明らかにしなければならない。「この」は、「その」や「あの」と比べて近くに指示対象があるから、直前をみると、「こういった発想」とある。「見方」と「発想」はほぼ同義語だから、「このような見方」＝「こういった発想」は確定してよい。では、「こういった発想」とは何か。直前を見ると、「不変の自分なるものがある」ことを前提に、「昨日の自分と現在の自分が認識できる」ことが結論されている。「こういった発想」が指示しているのは、ここで述べられている論理全体（前提と結論の関係）である。以上の読解を、構成フェーズを踏まえてまとめてみよう。

「不変の自分なるものがある」ことを前提に、「昨日の自分と現在の自分が認識できる」ことが結論される、という見方がある。その論理立てが、前提から誤りである可能性は、どのような根拠によって支持されるか。

さて、問い自体がはっきりしたので、いよいよ問いの答えを考え始める段階まで到達した。前提が誤りであるとは、「不変の自分なるものがある」ことが誤りであるということである。その理由を本文に戻って探すと、「過去の自分と現在の自分という二つの自分があるのではない。あるのは、今働いている自分ただ一つである。生成しているところにしか自分はいない」という記述にたどりつく。自分は、「生成しているところ」＝「今」にしか自分がおらず、「過去の自分」を含めた「不変の自分」がいないわけではないのである。ここまでの成果をまとめてみよう。

「不変の自分なるものがある」ことを前提に、「昨日の自分と現在の自分が認識できる」ことが結論されている、という論理立てが、前提から誤りである可能性は、「生成しているところ」＝「今」にしか自分がおらず、「過去の自分」を含めた「不変の自分」がいないという命題によって支持される。

では、「自分」は「今」にしかないとする、「過去の自分」とは何だったのか？どこにいるのか？それとも消え失せたのか？そもそも存在したことが無いのか？もう少し先を読んでいくと、その答えも明らかになってくる。「過去の自分は、身体として意味として現在の自分のなかに統合されており、その限りで過去の自分は現在の自分と重なることになる」という一文である。過去の自分は現在の自分と「独立」に存在するのではない。過去の自分は、つねに、現在の自分のなかにしかないのである。ここまで読むと、第一段落で「過去の自分と現在の自分」を別々のものとして立てたことが批判されていた意味が見えてくる。確かに、過去の自分は現在の自分と独立には存在してはいない。しかし、過去の自分は現在の自分のなかに統合されたかたちで存在しているのであって、消え失せてしまったわけではないのである。ここまでを含めて答案を書くと次のようになる。

「不変の自分なるものがある」ことを前提に、「昨日の自分と現在の自分が認識できる」ことが結論されている、という論理立てが、前提から誤りである可能性は、「生成しているところ」＝「今」にしか自分がおらず、「過去の自分」を含めた「不変の自分」がないという根拠によって支持される。その根拠が成り立つ理由は、過去の自分は現在の自分のなかに統合されたかたちで存在することしかできず、現在の自分と独立に存在しているわけではない、という事実求められる。

表現フェーズ

しかし、本番はせいぜい70字ほどしか書けないのであるから、以上の論理を縮約して表現しなければならない。表現フェーズでは、いかに短く的確に、そして日本語として美しい文章に答案をまとめるかが勝負になる。

まずは、何度も同じようなことを言わなくてよいように、文章の構成を考えよう。「(Xを前提にYが帰結すること)は(Zという理由で、Xという前提から誤りである)からだ」という論理は、「Zという事実があるので、Xではない」と縮約できる。というのは、ZがXを否定した瞬間に、 $X \rightarrow Y$ という論理自体の意味がなくなるからである。ここまでを活かして答案を書くと次のようになる。

「不変の自分なるものがある」という前提から誤りである可能性は、「生成しているところ」＝「今」にしか自分がおらず、「過去の自分」を含めた「不変の自分」がないという根拠によって支持される。その根拠が成り立つ理由は、過去の自分は現在の自分のなかに統合されたかたちで存在することしかできず、現在の自分と独立に存在しているわけではない、という事実求められる。

この先は、Zが二段階になっているので、これを整理すればよい。過去の自分が独立に存在しないこと、その理由が過去の自分は現在の自分に統合されてしか存在しえないことが、後半の部分の本質である。それゆえ、以下の答案が答えになる。

現在の自分に統合されることでのみ過去の自分は存在するので、過去の自分がそれ自体として独立に存在しているという前提は成立しないから。(65字)

他社解答例の講評

A社

答案

過去と現在を貫く不変の自分を想定することは、過去を統合しつつ生成する自分を分断して別個にとらえることになるから。(57字)

Schip採点 5点 読解点：2点 構成点：2点 表現点：1点

素晴らしい答案である。このような答案が本番で書けるのが望ましい。

B社

答案

あるのは過去の自分が統合され現在生成する自分だけなのに、不変の自分を前提とし過去と現在の二つの自分があるとしているから。(60字)

Schip採点 5点 読解点：2点 構成点：2点 表現点：1点

こちらも素晴らしい答案である。前提が誤っているのを明記している限りで、A社の解答よりもよいものである。このような答案が本番で書けると最高である。

C社

答案

不変の自分という発想は、過去を統合した現在の生成としてしかありえない自分を、過去と現在に分断することを前提とするから。(59字)

Schip採点 3点 読解点：2点 構成点：0点 表現点：1点

「前提」はなにか？を指摘するにとどまっており、過去と現在に分断することが前提とされているのが誤りである理由にはなっていない。構成フェーズでのミスである。

コラム：証明と支持

東京大学教育学部の南風原朝和教授が執筆している『心理統計学の基礎』の第一章に証明と支持の差異について書かれている。

論理的に言えば、「仮説が正しければ、予測通りの結果が得られる」という命題が真でも、その逆、つまり「予測通りの結果が得られれば、仮説は正しい」という命題は必ずしも真ではないということです。(p.3)

ここで南風原教授が主張していることを具体例で置き換えてみよう。例えば、「本が好きな人ほど、図書館によく行く」という仮説を立てる。ここで、本が好きな人のうち図書館によく行く人は90%である一方、本が好きでない人のうち図書館によく行く人は20%であるというデータが得られたとする。このデータは、仮説から予測される現実と合致しているのので、仮説を支持している。一方で、このデータで仮説を証明することはできない。というのも、データでできるのは仮説を証明することではなく、反証することだけだからである。反証とは、データが仮説と異なる場合に、仮説が誤っていると結論づけることである。この点についても、南風原教授の例を援用しよう。

たとえば「犬ならば、動物である」という命題は真であるのに、その逆の「動物ならば、犬である」という命題は真でないというような例を考えれば明らかでしょう。[……]

「犬ならば、動物である」という真の命題については、その対偶である「動物でなければ、犬ではない」という命題も真です。

データをいくら集めても、仮説は立証できない。同じように、現代文では、本文に書かれたことのみが根拠なのであるから、命題を証明することは困難である。せいぜい、筆者の立てた命題を、筆者の挙げたデータをもとに支持することができるだけである。それゆえ、「なぜそういえるのか」という問いが大勢を占めることになる。

ただし、演繹的な議論の組み立て方をしている場合、筆者の提示した前提を共有することによって、どんなときでも必ず結論が成り立つことを示すことができる。このときのみ「なぜか」という根拠を問う問題に正確に答えることができる。このタイプの議論はアリストテレスによって整理された三段論法の形式を取っていることが多い。三段論法は大きく2つの形式に分けられる。

1. 「AならばBである」かつ「Aである」ゆえに「Bである」
2. 「AならばBである」かつ「BならばCである」ゆえに「AならばCである」

このような初等論理学を知っていることは、現代文を根拠をもって解答するための大きな手助けになる。詳しく知りたい人は、野矢茂樹『論理学』を覗いてみるとよい（私も東大受験生時代に読んだ）。ただし、このコラムが「支持と証明」の対比の説明から始まったことを忘れてはならない。現代文を全て論理学で解くことはできない。あくまで論理学はツールである。そのことを忘れると、かえって、現代文はできなくなってしまうだろう。

D社

答案	過去と現在の自己の差異を貫く不変の自己という発想は、現在の自分に統合されているはずの過去の自分を、現在の自分と別に設定しているから。(66字)
Schip採点	4点 読解点：2点 構成点：2点 表現点：0点

よい答案である。欲を言えば、傍線部の「出発点」のニュアンスを保存するために、「前提」というキーワードも欲しかった。なお、字数の関係から表現点は加点できなかった。

E社

答案	自分とは、身体的にも、経験から現在を意味づけるように意味的にも、過去の自分を統合し、一つの働きとして現在生成するものであることを看過しているから。(73字)
Schip採点	1点 読解点：1点 構成点：1点 表現点：-1点

過去の自分を現在の自分が統合するとき、それは身体的あるいは意味的である、というのが形式段落2の主要な論点であった。その意味で前半は正しい。しかし、構成フェーズで確認したように、設問の答えとしては、統合が身体的あるいは意味的であることの重要性は高くない。重要度の低い要素を詳しく述べた結果、肝心の「『このような見方』は独立の存在としての過去の自分を前提にしているから誤りだ」という論理が明白でない答案になっている。このように、正しい情報に優先順位をつけて回答に盛り込んでいくためにも、構成フェーズ（設問文・傍線部の解析）は重要である。なお、表現の面でも、「看過」という動詞の主語が抜けており、日本語としてよろしくないと言える。

F社

答案	存在するのは現に生成している自分だけであり、過去はそこに統合されているのに、過去の自分と現在の自分が別個に存在すると考えているから。(66字)
Schip採点	4点 読解点：2点 構成点：2点 表現点：0点

良い答案である。過去の自分は現在に統合されている、存在しているのは現在の生成している自分だけ、傍線部は過去の自分と現在の自分を分離している、そのすべてが網羅されている。なお、表現点は字数の観点から加算できなかった。

設問（二）

問題	「この運動を意識的に完全に制御できると考えてはならない」（傍線部イ）とあるが、なぜそういえるのか、説明せよ。
解答例	ときに無意識に過去の経験を統合しつつ生成する自分の働きに対して、受け手である他者が認めた意味によって、自分らしさが現れてくるから。（65字）
思考の目次	<p>構成フェーズ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「傍線部」がなぜそういえるのか、と問われたとき、どのように答えればいいのか？ ・ 「考えてはならない理由」はどのような形式で答えられるか？ <p>読解フェーズ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「この運動」とはなにか？ ・ 「意識的に制御できない部分」はどこか？ ・ 過去・他者・生成・自分らしさの関係はどうなっているか？

構成フェーズ

まず、設問文をみよう。設問（一）と同じように、「なぜそういえるのか」という問いになっている。それゆえ、設問（一）で解説したように、「傍線部イ」という命題を証明する論拠ではなく、「傍線部イ」を支持する理由を考えればいいことになる。

つぎに、傍線部をみよう。傍線部は「ならない」という禁止の表現になっている。それでは、ある事柄が禁止される理由とはなんだろうか。「Xが禁止されている」理由として「Xをしてはならないから」と答えるだけでは同語反復である。また、「Xが悪い」というのでは答えとしては弱い。例えば、万引きが禁止されているのはなぜかと問われて、万引きは悪いことだからと答えるのは小学生のような解答だろう。できれば、万引きによって店主の生活が脅かされるから禁止されている、などと根拠をつけて答えたい。つまり、Xが禁止されている理由を考えることは、Xによってどんな害が生じるか考えることである。

それでは、「この運動を意識的に完全に制御できると考える」ことが禁止される理由は何だろうか。つまり、「この運動を意識的に完全に制御できる」と考えるこ

とでもたられる害は何だろうか。傍線部をもっとよく見ると、「完全に…と考えてはならない」という形式になっている。ここでのポイントは、「完全に…できると考えてはならない」という部分否定であることである。部分否定であるということは、「制御できる部分もあるが、制御できない部分もある」ということである。それゆえ、「この運動を意識的に完全に制御できると考える」ことでもたらされる害は、「この運動を意識的に制御できない部分」が見逃されることであると言える。ここまでをまとめると、この設問で答えるべき答えは、どのような問いを考えることで得られるかが分かる。

この運動には、意識的に制御できる部分もあるが、意識的に制御できない部分もあるから。

読解フェーズ

それでは、本文を見てみよう。まず、「この運動」とはなにか？と問わなければならない。例によって、「この」は近くに指示対象があるはずだから、直前をみると「この生成の運動」とある。さらに前をたどると「他者からの応答によってその姿勢が新たに組み直されること」が「自分の生成」とあるとある。では「その姿勢」とはなにか。また前を見ると「そのような過去への姿勢」とある。さらに前を見ると、「つまり」のあとに「自分の出会ったさまざまな経験を、どのようなものとして引き受け、意味づけているか」とある。かなり複雑な構造になっているので、一度整理してみよう。整理すると、「自分の生成という運動」とは、「自分の出会ったさまざまな経験を、どのようなものとして引き受け、意味づけているかという、過去への姿勢が、他者からの応答によって新たに組み直されるという運動」である。ここまでを構成フェーズを踏まえてまとめてみよう。

自分の生成という運動（他者からの応答によって過去への姿勢が組み直されること）には、意識的に制御できる部分もあるが、意識的に制御できない部分もあるから。

それでは、意識的に制御できる部分と制御できない部分は、どのような点にあるのかを読み解いていこう。自分の生成という運動は、「過去への姿勢」と「他者からの応答」という二つの要素からなりたっていた。そのそれぞれに、意識的に制御できない部分があることが述べられている。第一に、過去への姿勢は、「自分の出会ったさまざまな経験を、どのようなものとして引き受け、意味づけているか」という姿勢として定義されていた。そのあと、「重要なのは、なにを忘れ、なにを覚えているか」とある。どのような過去を現在の自分に統合するかどうかは、完全に意識的に決定できるのではない。ここが、解答構成のための第一の核となる。

第二に、「他者からの応答」が制御できないとはどういうことなのだろう。他者からの応答によって、どのように過去への姿勢を組み替えるか自体は、自分が意識的に遂行できることもある。例えば、友人に「案外、臆病だね」といわれたとき、忘れていた過去の臆病だった自分を思い出すといったことだ。しかし、友人が「案外、臆病だね」と言うかどうか自体は、自分が意識的に制御できることではない。この点が、「自分の自分らしさは他人によって認められる」という表現で述べられている。さらに、「自分とはこういうものであろうと考えている姿と、現実の自分が一致していることは稀である」とある。

自分の生成という運動のうち、どんな過去の自分を統合するかについては無意識の部分も多く、自分の自分らしさは他者によって認められるものであるので、意識的に制御できるものではないから。

さらに、「生成の運動」が、「他者」から判断され、認められることによって、「自分の自分らしさ」が現れてくる、という要素間の関係までも解答に含むことができたなら、意味論的には完璧な解答になる。なお、なお、本文のもっと先を読めばわかるが、「現れてくる」のところを「決定される」と書いてはならない。「決定される」もまた、他者や過去に特権性を付与しているという意味で、誤りである。

ときに無意識に過去の経験を統合しつつ生成する自分の働きに対して、受け手である他者が認めた意味によって、自分らしさが現れてくるから。(65字)

他社解答例の講評

A社

答案	他者からの応答に応じながら自分が生成するのであり、そうして現れる自分らしさも他人によって認められるものだから。(55字)
Schip採点	4点 読解点：1点 構成点：2点 表現点：1点

他者のみに焦点があたっており、過去の自分が現在の自分への統合されるとき、無意識でもありうるという点が看過されている。読解点の減点である。

B社

答案	他者からの応答によって自分は生成し、それに付帯する自分らしさも他者に判断されるべきもので自分の意図通りにはならないから。(60字)
Schip採点	4点 読解点：1点 構成点：2点 表現点：1点

こちらでも過去に関わる点を指摘し忘れている。読解点の減点である。

C社

答案	生成する自己の自分らしさは、世界への自分の働きかけが意図を超えた他者の応答に再編されて現れ、他人に判断されるものだから。 (60字)
Schip採点	4点 読解点：1点 構成点：2点 表現点：1点

意識的に制御できない対象として、過去と他者の2つがあるにも関わらず、片方しか指摘できていない。とはいえ、全体的によくまとまっている答案である。

D社

答案	自分らしさをもたらす生成の運動は、世界に対する自分の働きかけが、意のままにならぬ他者からの応答によって再構成されて初めて成立するから。(67字)
Schip採点	3点 読解点：1点 構成点：2点 表現点：0点

C社と同じく、過去の観点が抜け落ちている点が読解点の減点対象である。ただし表現の面では、C社と異なり、「ーは」で表される主題と「ーが」で表される主語が錯綜しており読みづらいため、表現点は加点されないだろう。

E社

答案	自分は、自らの働きかけに対する他者からの応答により再構成されて生成し、そこで現れる自分の自分らしさは、他者により判断され、認められるものだから。(72字)
Schip採点	2点 読解点：1点 構成点：2点 表現点：-1点

過去の視点が無いため、読解点が減点される。長い。他者の要素を2回出しているのが、長い原因である。自分らしさの生成過程を記述し、自分らしさの特性として他者により判断されることを述べたかったのだと思われるが、本文を読む限り、「自分らしさ」と「自分の生成」は不可分であり、このように分けて述べるメリットが特にあるわけではない。誤りではないが、冗長になり読みにくい。表現点も減点される。

F社

答案	自分らしさはことさら意識せずに為される行為のうちに自然に表出されるものであり、その受け手である他者によって認識されるものだから。(64字)
----	---

良い答案。過去の要素は、「ことさら意識せずに為される行為のうちに自然に表出」という表現によって、読みやすく自然なかたちで表されている。さらに、他者の影響によって、その自分の働きが解釈されることも後半で述べられている。素晴らしい答案である。ぜひとも参考にすべきであろう。

設問（三）

問題	「その認められた自分らしさは、すでに生成する自分ではなく、生成する自分の残した足跡でしかない」（傍線部ウ）とはどういうことか、説明せよ。
解答例	他人から認められた自分らしさは、生成の運動としての現在の自分らしさではなく、具体的行為として過去に現実化されたイメージの一つにすぎない、ということ。（69字）
思考の目次	<p>構成フェーズ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「…でしかない」とはどういうことか、にどう応答すればいいのか？ <p>読解フェーズ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「その認められた自分らしさ」とは、なにか？ ・ 「その認められた自分らしさ」が「すでに生成する自分ではない」とは、どういうことか？ ・ 「その認められた自分らしさ」が「生成する自分の残した足跡」でしかないとは、どういうことか？

構成フェーズ

まず、設問文をみると、「どういうことか」とある。それゆえ、傍線部を丁寧に言い換えればよい。それでは、傍線部をみてみよう。傍線部は3つに分解することができる。分解すると以下ようになる。「その認められた自分らしさ」は、すでに「生成する自分」ではなく、「生成する自分の残した足跡」でしかない。傍線部の論理的形式は「…でしかない」である。「AはBでしかない」というのは、どういう意味だろうか。「AはBでしかない」というのは、「Aには、CやDであるという可

能性はなく、AはつねにBである」ということである。別の言い方をすれば「AはB以外のなにものでもない」ということである。なお、「でしかない」という表現には、AはあくまでBであり、CやDになる可能性はない、というマイナスなイメージも含まれている。

それゆえ、ここでは、AがCである可能性を排除できるのはなぜか、Aが常にBである理由はなにか、ということが問われるべきである。

- 1) 「その認められた自分らしさ」が、「すでに生成する自分」ではない理由はなにか。
- 2) 「その認められた自分らしさ」が、「生成する自分の残した足跡」以外である可能性をもたないのはなぜか。

しかし、もう少しよく考えてみよう。「すでに生成する自分」ではないという表現には、「すでに」という時間表現が組み込まれている。「すでにAではない」ということは、「過去にAであったかもしれないが、現在はAではない」という意味である。「すでに雨は降っていない」という表現があれば、「過去には雨が降っていた」と解釈するのが妥当であろう。それゆえ、傍線部は正確に言えば、「その認められた自分らしさ」は、過去には「生成する自分であった」が、現在は「生成する自分でない」ということである。足跡という表現から、現在と過去の対立構造を見抜けば、ここで問われるべき問いをもっとすっきりさせることができる。つまり、未来において「他人によって認められた自分らしさが生成する自分である」可能性がありえないとすれば、「他人によって認められた自分らしさが生成する自分である」のは現在か過去のどちらかにおいてでしかないことになる。そして、現在においてそうであることと過去においてそうであることという二つの可能性が排反であるとすれば、現在において「他人によって認められた自分らしさが生成する自分である」ことを否定すると、それは過去においてそうであるしかなくなる。したがって、次のように問い直せる。

「その認められた自分らしさ」は、過去において「生成する自分」であったのに、現在においては「生成する自分」ではない理由は、なにか。

読解フェーズ

まず、指示語の意味を確定しよう。「その認められた自分らしさ」とはなにか。「その」とあるので、やや遠い位置に指示対象があると考えられる。「自分らしさ」「認める」という言葉を手がかりに指示対象を探すと「自分らしさは他人によって

認められるのではあるが、決定されるのではない」という一文が見つかる。それゆえ、「その認められた自分らしさ」とは、「他人によって認められた自分らしさ」であるといえる。これを構成フェーズと合わせて、問いを練り直すと次のようになる。

「他人によって認められた自分らしさ」は、過去において「生成する自分」ではあったのに、現在においては「生成する自分」ではない理由は、なにか。

問いを上記のように練りなおしてみると、「他人によって認められた自分らしさ」と「生成する自分」が対比されていることがわかる。ここでは、本文の記述を手がかりに、両者の特徴を表のかたちにして整理してみよう。

他人によって認められた自分らしさ	生成の運動において現れる自分らしさ
過去	現在
固定的	動き・運動（固定的に捉えることはできない）
生成する自分の残した足跡	生成する自分
具体的行為＋他者の解釈	（虚への志向性）
現実化	可能性

このように対比される二つの自分らしさが接続する接点は、「自分について他人が抱いていた漠然としたイメージを、一つの具体的行為として自分が現実化する」という記述に求められる。すなわち、生成の運動は、つねに具体的行為（足跡）を残していくが、そこに他者は「自分」について抱いていたイメージを読み込むのである。具体例で考えてみよう。山田くんは、花子さんを美しいふるまいをする女性だと思っていた。あなたが花子さんだとしてみよう。あなたは、家でだらけるときもあれば、学校で美しくふるまうときもあるだろう。あなた（花子さんという生成の運動）は多様な側面を持っている。しかし、山田くん（他人）は、美しくふるまうあなたの具体的行為に着目し、やっぱりあなたが美しいと判断する。けれども、それによって、自分（花子）の自分らしさから、家でだらけているところが排除されるわけではない。山田くんの認めた 自分（花子）の自分らしさは、自分の自分らしさのあくまでOne of themにしかすぎないからである。

他人から認められた自分らしさは、生成の運動としての現在の自分らしさではなく、具体的行為として過去に現実化されたイメージの一つにすぎない、ということ。（69字）

A社

答案	他人によって抱かれた自分のイメージは、不断に生成し続ける自分が行った一つの具体的行為に基づいた、自分の一断面だということ。(58字)
Schip採点	4点 読解点：2点 構成点：1点 表現点：1点

「他人によって抱かれた自分のイメージ」が主語になっている点が、傍線部と乖離している。ここで構成点を減点した。

B社

答案	自分らしさは不断に生成してゆくので、一つの具体的行為からそのとき他人に認められた自分らしさも、そのとき限りのものだということ。(63字)
Schip採点	4点 読解点：1点 構成点：2点 表現点：1点

生成していくのは「自分」であって「自分らしさ」ではない。自分らしさは、自分という生成の運動のうち、他者が具体的行為に基いてイメージ化したものである。このポイントが前半部分と反しているので読解点を一点減点した。

C社

答案	他人が認めた自分らしさは、不断に変化し続ける現在の自分にとって、その過程のうちの固定された一断面でしかないこと。(63字)
Schip採点	4点 読解点：1点 構成点：2点 表現点：1点

「その過程のうちの固定された一断面でしかない」という表現について、過去に具体的に行われた行為について他者が解釈し、現実化したイメージであるという本文の内容が完全に含まれているとはいいいがたい。この答案は、非常にまとまっているが抽象度がやや高すぎ、変化か固定かという、言葉上の二項対立の指摘に留まっている。本文の意味内容にもう少し即した答案構成としたい。そこで読解点を1点減点した。

D社

答案	ある時点で他者が認めた自分らしさは、その認定とともに変容していく自分の動きを含んでおらず、生成する自己の一断面でしかないということ。(66字)
Schip採点	4点 読解点：1点 構成点：2点 表現点：1点

D社も、一断面という言葉で答案を構成している。奇妙な一致であるが、やはり一断面であるという表現では、変化か固定かという抽象的な言葉の対立以上の内容を含んでいない。

E社

答案	他人によって認められた自分らしさは、固定的に捉えられない生成の運動たる自分ではなく、他人が抱く自分のイメージが具体的行為として現実化されたものだという事。（78字）
Schip採点	3点 読解点：2点 構成点：1点 表現点：-1点

第一に、長い。他人、現実といった言葉が何度もでてくる（文章がきちんと構成されていない）のが原因である。それゆえ75字を超えてしまった。1点の減点である。第二に、設問では「足跡でしかない」の説明が求められているのに、着地が「現実化されたものである」で終わっており、十分な説明になっていない。内容は本文と食い違っていないので読解点は2点与えられるが、「現実化されたものの一つである」といったように、One of Themであることの明示が必要だ。

F社

答案	他者の認める自分らしさは、現に生成しつつある自分を示すのではなく、自己生成の運動の結果生じた過去の痕跡を示すにすぎないということ。（65字）
Schip採点	4点 読解点：1点 構成点：2点 表現点：1点

良い答案だが、採点者によって議論があるところもある。「自己生成の運動の結果生じた過去の痕跡」という表現は、生成の運動の一つを、他者が解釈してイメージ化したのが足跡であるという内容を十分に踏まえられているか、という問いがありうる。「他者」が冒頭にあり、「痕跡」という表現があることから、連想によってその意味を読み取ろうと思えば読み取ることはできる。とはいえ、直接に答案に示されているわけではない。そこで、ここでは保守的に採点し、一点減点とした。

設問（四）

問題	「残された足跡を辿る人間には、その足の運びの運動性が感得される」（傍線部エ）とはどういうことか、説明せよ。
----	---

解答例

死者の残した具体的行為に相對する他者は、死者の働きかけに応答しながら新たな意味を引き出せることを、まざまざと感ずるということ。(63字)

構成フェーズ

- ・ 「どういうことか」という問いに、どう応答すればよいか。
- ・ 「残された足跡を辿る」とはどういうことか？

思考の目次

読解フェーズ

- ・ 「残された足跡を辿る」とはどういうことか？
- ・ 「その足の運びの運動性」とはなにか？
- ・ 「運動性が感得される」とはどういうことか？

構成フェーズ

まずは設問文をみてみよう。設問文は「どういうことか」と問うている。それゆえ、傍線部を素直に言い換えればよい。

つぎに傍線部をみてみよう。傍線部は、「残された足跡を辿る人間」には、「その足の運びの運動性」が「感得される」ことが述べられている。傍線部内部の關係に着目すると、「足」というのをキーワードに、やや時系列と人稱が交錯していることが読み取れる。それを分かりやすく整理すると、以下のようになる。

まず、死者Xがあり、その死者Xは、足跡Yを残した。その足跡Yには、「足の運びの運動性」が宿っている。死者Xの足跡Yを辿る他者Zは、足跡Yに宿る「足の運びの運動性」を「感得することができる」。

傍線部は、以上のことを前提とした表現である。とするならば、「足の運びの運動性」という表現に、死者X、足跡Y、他者Zを結びつけるなにかがある、ということになるだろう。それでは、死者X、足跡Y、他者Zの關係はいかなるものだろうか。

足の運びの運動性とは、なにか？

⇔ 死者X、足跡Y、他者Zの關係はいかなるものだろうか。

この問題は、本文全体を視野にいれなければ、着眼点はみえてこない非常に難しい問題である。「働き」や「運動」とはなにを意味するかについて、設問二や設問三でも扱ってきた。そこでは、現在自分が生成していることが、働きであり、運動であることが主張されていた。しかし、ここでは、その主張こそがくつがえされようとしているのである。ここでは、「足の運びの運動性」という表現が与えられ、足跡に運動性が宿ることが主張されている。直後のソクラテスについての具体例を参照してみよう。

死んでいる	生きている
自分としてのソクラテス	働きとしてのソクラテス
生成する自分	生成する自分の足跡

ここでは、自分としてのソクラテスと、働きとしてのソクラテスが分離されている。さきほどの意味段落では、自分＝働きであったものが、今度は分離されているのである。働きが自分（現在）から分離されたことによって初めて、働きが足跡（過去）に宿る理路が開かれることになる。この点を理解することがこの設問の読解フェーズではなによりも重要である。直前にある次の表現は、この理路が開かれたことを意味している。「なるほど、自分はもはや生成することはないし、その足跡はわれわれの生誕と死によってはっきりと限られている。しかし、働きはまだ生き生きと活動している。ある人間の死によって、その足跡のもっている運動性も失われるわけではない。」

では、自分から分離されうる「働き（運動性）」とは何なのか。そのことが改めて問われなければならない。まずは、これまでの意味段落で定義されてきた意味について確認しよう。意味段落(2)で「働き」という概念が導入されたときは、「他者に働きかけること」を意味していた。それを受けるかのうように、傍線部の次の段落にも、「われわれの働きは徹頭徹尾他人との関係において成立し、他人によって引き出される」ものであることが述べられている。それゆえ、「他者と関係すること」であるという「働き」の定義はここまで保存されていることが分かる。

実は、「働きかける」にはもう一つの意味がある。意味段落(2)では、「過去への姿勢を、現在の世界への姿勢として自らの行為として表現すること」として「働き」が導入されてきたことを憶えているだろうか。ここを踏まえることで、「働き」が現在の自分から分離され、かつ、他者と関わるということの意味が見えてくる。

足跡であれば、行為は変わらない。しかし、その行為にどのような意味を読み取るか、つまり、どのような世界への姿勢を読み取るかは、他者に委ねられている。

それゆえ、足跡は死後も運動性をもっているといえるのである。構成フェーズの表現を援用すれば、死者Xが残した足跡Yに「働き」が宿っているということは、足跡Yに内在している潜在的な意味を他者Zが引き出すことができるということの意味しているのである。

死者の残した具体的行為に相対する他者は、死者の働きかけに応答しながら新たな意味を引き出せることを、まざまざと感ずるということ。(63字)

他社解答例の講評

A社

答案 自分が死んでも、自分が現実化した行為の跡を他者がたどれば、当時自分が生成した様子を他者も感じ取れるということ。(55字)

Schip採点 3点 読解点：1点 構成点：2点 表現点：0点

「自分が生成した様子を他者が感じ取れる」では意味が通らない。ここがどういう意味なのかを説明するのが本文の核心である。

B社

答案 当人の死後も、様々な経験を引き受け意味づけたその折々の姿勢は、知ろうとする人には生きた活動として実感できるということ。(59字)

Schip採点 2点 読解点：0点 構成点：2点 表現点：0点

「その足の運びの運動性が感得される」ことの意味は、他者が関わり、意味を引き出すところに求められるのであって、死者の行為を追体験するだけではない。この点を理解していないので、読解点は加点できない。また、設問点としては、「足跡」の説明をしようとしている限りで、1点加算される。

C社

答案 自分の可能性を求め続けた人の生の働きは、当人の死後にその軌跡を辿る他者の中で生き生きとよみがえるということ。(54字)

Schip採点 2点 読解点：1点 構成点：1点 表現点：0点

本文では、ソクラテスが引用されているが、それはあくまで具体例であり、筆者の主張は「自分の可能性を求め続けた人」に限定されているわけではない。それゆえ、前半部分は誤りである。ここで読解点が減点される。また、「生き生きとよみ

がえる」というのは、傍線部の説明としては不十分である。したがって、構成点を1点減点した。

D社

答案	ある死者が残した様々な足跡を追うことで、そのつと与えられる像を裏切りつつ変化していった当人の生の動きを、自らの内に追体験すること。(65字)
Schip採点	1点 読解点：0点 構成点：1点 表現点：0点

「そのつと与えられる像を裏切りつつ」という表現は、本文に対応する意味を見出すことができない。ここで読解点が減点される。また、「自らの内に追体験」も誤りである。最終形式段落をよく読めばわかるように、「その足の運びの運動性が感得される」ことの意味は、他者が関わり、意味を引き出すところに求められるのであって、死者の行為を追体験するだけではない。ここでも読解点が減点される。設問点としては、「足跡」の説明をしようとしている点で、1点加算される。

E社

答案	一人の人間の死後も、その人間の実現した具体的行為の結果に触れる者にとっては、それがあたかも生きている人間の働きであるかのように感じられるということ。(74字)
Schip採点	3点 読解点：2点 構成点：1点 表現点：0点

「あたかも生きている人間の働き」という部分が説明不足。ここが具体的にどういふことなのかを説明するのがこの問題の要諦であった。それゆえ、設問に正しく答えられていない。ここで構成点が減点される。

F社

答案	自分が死んでも、自分が生きた過去の痕跡を追う他者がいれば、その他者によって生前の自己生成の働きが生き生きと再現されるということ。(64字)
Schip採点	5点 読解点：2点 構成点：2点 表現点：1点

これは良い答案である。しかし、採点者によって議論があるところだ。「生前の自己生成の働きが生き生きと再現される」という言葉は、本文の表現をそのまま使っている。確かに、本文では、自己生成は他者が意味を引き出すことによって成立するといっており、その意味で、「自己生成の働きの再現」とは、その一連のプロセスを含んでいるといえる。しかし、この答案だけ読んでも、本文を読んでいない者にはそこまで表象できない。それゆえ、答案は本文と独立して解釈できなければな

らないのであれば、一連のプロセスの理解不足となり、読解点を1点減点せざるをえない。とはいえ、「次の文章を読んで、後の設問に答えよ」と最初に指示があるのだから、ここでは満点を与えてよいだろうと判断した。

設問（五）

問題	「この秘められた、可能性の自分に向かうのが、虚への志向性としての自分の方向性でもある」（傍線部オ）とあるが、どういうことか。本文全体の論旨を踏まえた上で、一〇〇字以上一二〇字以内で説明せよ（句読点も一字と数える）。
解答例	多様な可能態としての自分らしさは、ときに無意識に過去の自分を統合しつつ生成する自分に含まれており、自分の生前死後を問わず、自分の残した具体的行為から他人によって引き出されるほか、自分のイメージから逸脱しようとすることによって現象するという。 （119字）

構成フェーズ

- ・ 傍線部の「は」と「が」の違い、「も」があるかないかの違いとは？
- ・ なにを問うべきか？

読解フェーズ

- ・ 「この秘められた、可能性の自分」とはなにか？
- ・ 「虚への志向性としての自分の方向性」とはなにか？
- ・ 「この秘められた、可能性の自分に向かうこと」が「虚への志向性としての自分の方向性」であるとは、どういうことか？

思考の目次

- ・ 「この秘められた、可能性の自分」に対比される「X」とはなにか？
- ・ 「虚への志向性としての自分の方向性」に添加される「Y」とはなにか？

再構成フェーズ

- ・ 本文全体を踏まえるとなにが追加できるか？

表現フェーズ

- ・ どのように各表現を圧縮できるか？
- ・ どのような並びで記号を配列すると、読みやすく、かつ、論理的に自然な文章になるか？

構成フェーズ

難問である。傍線部を緻密に分析した上で、本文全体の要旨を理解するのみならず、論理を再構成することまでもが求められている。とはいえ、手順としてはほかの設問と変わらないので、一步一步確実に見ていこう。

設問をみると、「どういうことか？」とある。本文全体の論旨を踏まえるという制約はあるものの、まずは素直に傍線部をみて、実直に言い換えてゆく。傍線部をみると、「この秘められた、可能性の自分に向かうのが、虚への志向性としての自分の方向性でもある」とある。

ここを形式的にとりだすと、「Aするのが、Bでもある」となる。この文は二つの意味で特殊である。第一に、主語（主題）を示すのが、「は」ではなく、「が」である。第二に、文末が「である」ではなく「でもある」である。これは何を意味しているのだろうか。ここを考え抜くのが、この問題で最も難しく、最も大切なところである。

例えば、「駅に向かうのは、私の希望である」という文を考えてみよう。この文を、主語と述語を変えることで4パターン考えてみる。

	主語＝「は」	主語＝「が」
述語＝「である」	駅に向かうのは、私の希望である。	駅に向かうのが、私の希望である。
述語＝「でもある」	駅に向かうのは、私の希望でもある。	駅に向かうのが、私の希望でもある。

以上の文章をみると、主語が「は」であるより「が」である場合、主語がほかのものとは区別されて強調されている印象をうける。それとともに、述語に「も」が加わることで、なにかが添加されたものであることが示されている。以上の考察を踏まえ、暗黙に示されているものを明示的に示すと、以下のようになる。

	主語＝「は」	主語＝「が」
述語＝「である」	駅に向かうのは、私の希望である。	（港ではなくて）駅に向かうのが、私の希望である。
述語＝「でもある」	駅に向かうのは、（タロウさんの希望であることはもちろんのこと）私の希望でもある。	（港ではなくて）駅に向かうのが、（タロウさんの希望であることはもちろんのこと）私の希望でもある。

これまでの考察から分かることは、「この秘められた、可能性の自分に向かうのが、虚への志向性としての自分の方向性でもある」という文は、次のことを意味している。

（「X」ではなくて）「この秘められた、可能性の自分に向かうこと」が、（「Y」であることはもちろんのこと）「虚への志向性としての自分の方向性」でもある

それゆえ、問われるべきは以下の5つの問いであろう。ここでは、読解フェーズでこれらに順番に答えていけばよい。

- ・ 「この秘められた、可能性の自分」とは、なにか？
- ・ 「虚への志向性としての自分の方向性」とは、なにか？

- ・ 「この秘められた、可能性の自分に向かうこと」が「虚への志向性としての自分の方向性」であるとは、どういうことか？
- ・ 「この秘められた、可能性の自分」に対比される「X」とはなにか？
- ・ 「虚への志向性としての自分の方向性」に添加される「Y」とはなにか？

読解フェーズ

それでは、一つひとつの問いについて、本文に立脚しながら見ていくことにしよう。最初の問いは【「この秘められた、可能性の自分」とは、なにか？】である。本文では、形式段落9の「そして」以降の部分が手がかりになる。以下に該当するところを引用しておこう。

1. 「自分が生成することをやめてからも、その働きが可能であるとするならば、その可能性はこの現在生成している自分に含まれているはずである」
2. 「そのように自分の可能性はなかば自分に秘められている」
3. 「この秘められた、可能性の自分」

これらから、問いへの回答を導出してみよう。「この」や「その」という指示語があるので、それにしたがって圧縮していけばよい。第一に、2と3から、可能性の自分＝自分の可能性である。第二に、1と2から、自分の可能性とは、「現在生成している自分に含まれている、自分が生成することをやめてからも可能であるような働き」である。以上2つの点を組み合わせることによって、問いへの回答が得られる。

「この秘められた、可能性の自分」とは、なにか？

→ 自分が生成することをやめてからも働きが可能であるという可能性が、現在生成している自分に含まれているということ。

次に、【「虚への志向性としての自分の方向性」とは、なにか？】という問いについて検討する。該当するのは形式段落6－7である。その部分を形式化しながら、以下に抜き出してみよう。

1. 「生成する自分を貫く特徴……自分の方向性」
2. 「生成の方向性は生成のなかで自覚される以外にない」
 - ・ 「自分についての漠然としたイメージが具体化することで、生成の方向性が自覚されるというのではない」

コラム：現実態と可能態

設問5の表現フェーズにおいては、字数の関係から本文で用いられていない用語をキーワードとして解答に使用した。そのため、可能態という言葉の意味をここで簡単に解説する。

可能態は、もともと哲学の伝統のなかで使われていた用語であった。どのような文脈の中で使われていたか、ライプニッツの『弁神論』から有名な箇所を引用して示しておこう。

ありうる世界は無数にあるが、その中で最良のものはただひとつである。さもなくば、神はその世界を創造することはできなかったであろう。

ここで論じられていることはなにか。「現実世界」と「可能世界」の対比である。私たちが生きているこの「現実」は、たまたま私たちの生きている「今・ここ」が、この「現実」であるということに根拠をもつにすぎない。世界はもっと様々な可能性を持っている。例えば、僕が総理大臣である世界もあるはずだし、論理的にはこの世界と等価である。しかし、それを踏まえた上でなぜこの世界が現実なのか、ということが問われているのである。もともと、可能態とは、このような文脈のなかで「現実化されることが可能であるもの」として定義されて使用されていた。

次第に、この用語は、「世界」のみならず、さまざまなところで使用されることとなった。例えば、イタリアの哲学者であるジョルジョ＝アガンベンは『スタンツェ』のエピローグで次のように書いている。

批判的・哲学的伝統においては、作品は、事実上そこに含まれる内容によってのみならず、可能性として残されているものによっても評価される。つまり、作品が現実態（この場合課題として生きている）の彼岸に保管（「救済」）しえている可能態によってもまた評価されるのである。（p.238）

ここで述べられていることが、設問5の解答例で使った「可能態」の意味に非常に近い。ここで述べられているのは、作品の可能性は、現実のものとなっているもの以上に豊かであるということである。私たちは、しばしば作者の意図などというものを考えて、作品の解釈を一意に定めようとするが、それが作品を殺してしまう。作品は、まだ現実には誰も解釈をしていない意味を常に含んでいるからこそ、救済され続けるのである。そのことを「可能態」と表現しているのがこの箇所である。

本文では、「自分の可能性」がつねに存在し続けることが記述されていた。虚への志向性であれ、他者から引き出されるのであれ、私たちは常に現実に在る以上に可能性をもった「可能態」として生きているのである。しかも、その可能性は多様であり、虚への志向性によって一つ現実化されても、他者から引き出されて一つ現実のものとなっても、まだまだ私たちは可能性を含んでいる。私たちは、生きている限り「可能態」なのである。逆にいえば、だからこそ、生き続けることによっていつまでも新鮮なものに出逢い続けることもできるし、生き続ける意味もあるといえるのだろう。

- ・「イメージの具体化は、（生成の方向性ではなく）生成の足跡でしかない。」
- ・「生成の方向性」は「棒のような方向性」として自覚されるのではない。

3. 「生成の方向性」は「生成の可能性」として自覚される。

- ・イメージ＝足跡＝過去を、どれだけ否定し、逸脱できるか？
- ・現在生成する自分の可能性＝方向性＝「虚への志向性」＝「…でない」
- ・「虚への志向性」は、「自分が生成する瞬間に、生成した自分を背景に同時に自覚される」

以上のように抜き出してみると、虚への志向性としての自分の方向性とは、三つの特徴を持っていることが分かる。

第一に、自分が自分自身に抱くイメージや、他者が自分自身に抱くイメージから逸脱し、自由になろうとするという点である。第二に、棒のような方向性ではなく、生成した自分を背景に同時に知覚されるということである。第三に、「生成する自分を貫く特徴」である。

「虚への志向性としての自分の方向性」とは、なにか？

→ 自分や他人が抱く自分へのイメージから自由になろうとすることによって、生成した自分を背景に同時に知覚される、生成する自分を貫く方向性のこと。

今度は、【「この秘められた、可能性の自分に向かうこと」は、「虚への志向性としての自分の方向性」であるとは、どういうことか？】という問いについて見ていこう。ここからは、本文を圧縮していくというよりは、意味を理解しながら進んでいくことになる。

さきほどの例（「駅に向かうのは、私の希望だ」）に戻ると、駅に向かうこと＝私の希望、ということになる。これに習うと、「この秘められた、可能性の自分に向かうこと」＝「虚への志向性としての自分の方向性」であるということになる。それでは、この「＝」はなにを意味するのかを考えてみよう。

主語が「向かうこと」であり、述語が「方向性である」ということであるから、「可能性の自分に」「自分の方向性が」「向かう」ということである。これまでの成果を踏まえるとどうなるだろうか。まず、可能性の自分は「現在生成している自分に含まれている、自分が生成することをやめてからも働きが可能であるという可能性」のことを意味している。次いで、自分の方向性は「自分や他人が抱く自分へのイメージから、どれだけ逸脱し、自由になろうとするか」ということであつた。

それでは、改めて、「可能性の自分に」「自分の方向性が」「向かう」とはどういうことかを問うてみよう。

それは、現在の自分の中に眠っている可能性が、虚への志向性としての自分の方向性によって、引き出されるということである。というのも、可能性の自分は、現在の自分にも含まれているものであり、かつ、虚への志向性としての自分の方向性は、過去のイメージから自由になることであるからである。

「この秘められた、可能性の自分に向かうこと」は、「虚への志向性としての自分の方向性」であるとは、どういうことか？

→ 現在の自分の中に眠っている可能性が、虚への志向性としての自分の方向性によって、引き出されるということ。

再構成フェーズ

さて、ここからはいよいよ構成フェーズを踏まえつつ、読解フェーズで明らかになったことを加味しながら、設問の回答に向かっていくことにしよう。ここでの問いは【「この秘められた、可能性の自分」に対比される「X」とはなにか？】である。

この問いは、本文全体を視野にいれないと見えてこない。形式段落7の段階では、虚への志向性は、自分についてのイメージからどれだけ逸脱できるか、ということしか語られていなかった。しかし形式段落8-10において、自分の死後を視野にいれた論述がなされている。虚への志向性という言葉は、形式段落7を最後に姿を消したかのように思われていたが、傍線部で突然登場している。この華々しい登場の舞台裏こそ「X」なのである。

それゆえ、「死してなお」という条件が導入された形式段落8以降と、あくまで自分が生きていて生成しているときに限定されて論述されてきた形式段落7以前の二つを明確に分けているのが、傍線部の「が」という助詞であり、暗黙に明示されている「X」なのである。

「この秘められた、可能性の自分」に対比される「X」とはなにか？

→ 虚への志向性としての自分の方向性は、自分が生きて生成している場面に限定されたもの（X）ではなく、自分が死してなお、存在するということ。

次いで、【「虚への志向性としての自分の方向性」に添加される「Y」とはなにか？】という問いに移ろう。ここの問いに答えるのが最も困難である。

ここは傍線部周辺を丹念に追わなければみえてこないところである。傍線部は、「可能性の自分」に向かうのは、（Yであるのはもちろんのこと）「虚への志向性」でもある、となっている。それでは、Yはどのような意味で、虚への志向性と対比されているのだろうか。

あくまで、虚への志向性は、現在生成する自分の方向性であった。それと対比されるのは、直前にあるように、時空を超えて、他人から引き出される自分の可能性であろう。ここで、Yが明示されていないのは、可能性の自分は（生成する自分であっても、足跡であっても）、他人によって生を与えられることが示されているからである。ここでは、そのような他人の関わりのみならず、自分自身が過去や他人が自分に付与するイメージから逸脱することによっても、その可能性は引き出される、ということを述べている。それゆえ、ここでは、現在 \leftrightarrow 時空を超えた、自分 \leftrightarrow 他者という対比を読み取ればよかったのである。

「虚への志向性としての自分の方向性」に添加される「Y」とはなにか？

→ 生前死後を問わず、他人から引き出される自分の可能性。

さて、最後に本文全体を踏まえて、設問への解答を磨いていこう。最初にここまでの解答をまとめておこう。

過去の経験を意味付けながら現在生成している自分の残した具体的行為が、他人の判断によって解釈されたときに自分の自分らしさが認められるが、自分の死後に他人によって行為から新しい解釈の可能性が引き出されるように、その可能性は現在の自分にも含まれている。その可能性としての自分に向かうのが、過去の自分について現在の自分が抱くイメージや、他人が自分について抱くイメージを否定し、そこから逸脱し、自由になろうとする、虚への志向性であり、それが現在生成する自分の可能性として自覚される、自分の方向性（生成という運動を貫く特徴）でもあるということ。

少し長いので冗長な部分を削って簡潔なかたちにすると以下ようになる。

現在生成している自分に含まれている、自分が生成することをやめてからも働きが可能であるという可能性は、自分は生きている場面だけではなく、自分が死してなお、当然、他人から引き出され、なおかつ、自分のイメージから逸脱し自由になろうとすることによっても引き出されるということ。

この解答を本文全体から拾ってこれる要素にしたがって、一つずつブラッシュアップしていこう。この作業を経ることで曖昧な部分が明確になり、よい答案に一步近づくことができる。

第一に、「働き」とはなにか？について、意味段落(2)で多くの要素を発見することができる。一つ目は、働きとは、徹頭徹尾、他人との関係において成立するが、それ自体ではないということである。二つ目は、働きかけるとは、過去への姿勢を、現在への姿勢として自らの行為を通じて表現することであるという点である。三つ目は、他人は働きの受け手であり、働き自身は、自分に含まれているということである。それは、生成する自分であったり、自分の残した足跡であったりする。

第二に、「過去」の自分への向き合い方についてである。意味段落(1)で述べられていたのは、過去の自分は現在の自分に統合されてしか存在できないものの、それは「ときに無意識に、ときに意識的に」であるということであった。

以上2点を踏まえると解答は以下のようになる。（新しく追加した部分は<>でくくった）

くときに無意識に過去を統合しつつ>現在生成している自分に含まれている、自分が生成することをやめてからもく他人との関わりにおいて>働きが可能であるという可能性は、自分は生きている場面だけではなく、自分が死してなお、当然、<自分の残した足跡＝具体的行為において>他人から引き出され、なおかつ、自分のイメージから逸脱し自由になろうとすることによっても引き出されるということ。

（184字）

表現フェーズ

さて、再構成フェーズで解答の骨子はまとまったので、簡潔にしていこう。

まず、結局、他人に働きかけて、他人から認められるのは、自分らしさであるという点に着目しよう。その自分らしさは、生前死後を問わず、虚への志向性や足跡を辿られることによって引き出される多様なものである。このあたりを踏まえて、「多様な可能態としての自分らしさ」という表現に圧縮し、主語におく。なお、「可能態」という本文には存在しない言葉を用いて圧縮したが、可能態の意味についてはコラムを参照してほしい。

次に、多様な可能態としての自分らしさは、生成する自分に秘められていることを表現する際、その生成する自分が、過去の自分をときに無意識に統合していることに軽く触れることで本文全体を視野におさめる。

さらに、足跡（＝具体的行為）から可能性（＝多様な可能態としての自分らしさ）が引き出されるのは、生前死後を問わないことに触れる。これが、上記Xの観点である。また、可能性はもちろん他人によっても引き出されることを付け加える。これが上記Yの観点である。

最後に、可能性は、現在の自分の虚への志向性によっても引き出される（現象する、現れる）ことを明示する。

以上4点を網羅することによって、表現を圧縮することができる。最終的な解答は以下のようなものとなる。

多様な可能態としての自分らしさは、ときに無意識に過去の自分を統合しつつ生成する自分に含まれており、自分の生前死後を問

わず、自分の残した具体的行為から他人によって引き出されるほか、自分のイメージから逸脱しようとするということによっても現象するということ。（120字）

他社解答例の講評

採点基準 満点:12点

傍線部	「この秘められた、可能性の自分」についての説明	多様な可能態としての自分らしさ	0～2点
	「虚への志向性としての自分の方向性」についての説明	自分のイメージから逸脱しようとする	0～2点
本文全体	自分らしさの生成には、無意識に過去の自分を統合していることが前提となっていること（意味段落1）	ときに無意識に過去の自分を統合しつつ生成する自分	0～2点
	自分らしさは他者によって引き出される（意味段落2）	自分の残した具体的行為から他人によって引き出される	0～2点
	自分らしさが他者から引き出されて現象するのは、生前死後を問わないということ（意味段落4）	自分の生前死後を問わず	0～2点
論理構成	「でもある」についての説明（自分らしさが現象するのは、他者から引き出されるか、虚への志向性の2択であるということ（本文全体を踏まえてのもっとも重要な論理的骨子））	自分らしさは……他人によって引き出されるほか、……逸脱しようとするということによっても現象する……	-2～2点

A社

答案	自分の不断の生成は他人との関係において成立し、死後も自分の足跡が他人によって生を与えられる可能性を自分は秘めているが、それは、自分の生成が、他人や自分が抱く自分のイメージを否定し逸脱するという志向性をもつからであるということ。（113字）
Schip採点	10点（下記を参照のこと）

	採点基準	該当箇所	配点
傍線部	「この秘められた、可能性の自分」についての説明	自分の足跡が他人によって生を与えられる可能性を自分は秘めているが	2点
	「虚への志向性としての自分の方向性」についての説明	自分の生成が、他人や自分が抱く自分のイメージを否定し逸脱するという志向性をもつ	2点
本文全体	自分らしさの生成には、無意識に過去の自分を統合していることが前提となっていること（意味段落1）	（記載なし）	0点
	自分らしさは他者によって引き出される（意味段落2）	自分の不断の生成は他人との関係において成立	2点
	自分らしさが他者から引き出されて現象するのは、生前死後を問わないということ（意味段落4）	死後も	2点
論理構成	「でもある」についての説明（自分らしさが現象するのは、他者から引き出されるか、虚への志向性の2択であるということ（本文全体を踏まえてのもっとも重要な論理的骨子））	可能性を自分を秘めているが、…それは、…志向性をもつからである ※ここの根拠の一つとして、他者がでてこない点が減点	1点
表現点	（字数制限以外、通常傍線部に準じる）	読みやすく、簡潔である。	1点

B社

答案	現在の自分は不断に生成し自分が生成をやめてからも他人による生成が可能であることは、働きの可能性が現在の自分に含まれていることを意味するが、それは生成が他人や自分の抱く自分のイメージを否定して逸脱するという志向性を持つものだからだということ。（120字）
Schip採点	9点（下記を参照のこと）

	採点基準	該当箇所	配点
傍線部	「この秘められた、可能性の自分」についての説明	現在の自分は不断に生成し…働きの可能性が現在の自分に含まれていることを意味	2点
	「虚への志向性としての自分の方向性」についての説明	生成が他人や自分の抱く自分のイメージを否定して逸脱するという志向性を持つ	2点
本文全体	自分らしさの生成には、無意識に過去の自分を統合していることが前提となっていること（意味段落1）	（記載なし）	0点
	自分らしさは他者によって引き出される（意味段落2）	他人による生成が可能である ※やや説明不足	1点
	自分らしさが他者から引き出されて現象するのは、生前死後を問わないということ（意味段落4）	自分が生成をやめてからも	2点
論理構成	「でもある」についての説明（自分らしさが現象するのは、他者から引き出されるか、虚への志向性の2択であるということ（本文全体を踏まえてのもっとも重要な論理的骨子））	可能性が現在の自分に含まれている…それは…志向性を持つものだからだ ※ここの根拠の一つとして、他者がでてこない点が減点	1点
表現点	（字数制限以外、通常傍線部に準じる）	（読みやすく、簡潔である。）	1点

C社

答案	自己とは、固定された不変の存在ではなく、過去を引き受けつつ他者との関係において不断に生成され、自らの死後も他者の中で生き続けうる運動であり、そのような生の現在において、過去の自分を否定する自由にこそ新たな可能性が自覚されるものだということ。 (120字)
Schip採点	10点（下記を参照のこと）

	採点基準	該当箇所	配点
傍線部	「この秘められた、可能性の自分」についての説明	固定された不変の存在ではなく	2点
	「虚への志向性としての自分の方向性」についての説明	過去の自分を否定する自由	2点
	自分らしさの生成には、無意識に過去の自分を統合していることが前提となっていること（意味段落1）	過去を引き受けつつ ※無意識が不足	1点

	採点基準	該当箇所	配点
本文全体	自分らしさは他者によって引き出される（意味段落2）	他者との関係において不断に生成され 他者の中で生き続けうる運動 ※同じことを二度いって字数を無駄にしている	2点
	自分らしさが他者から引き出されて現象するのは、生前死後を問わないということ（意味段落4）	自らの死後も	2点
論理構成	「でもある」についての説明（自分らしさが現象するのは、他者から引き出されるか、虚への志向性の2択であるということ（本文全体を踏まえてのもっとも重要な論理的骨子））	自己とは…運動であり…そのような生の現在において…可能性が自覚される ※「そのような生の現在において」で接続しようとしていることが伺えるが、無理やりすぎて論理的には無理がある。	0点
表現点	（字数制限以外、通常傍線部に準じる）		1点

D社

答案	自分らしさとは、他者との応答の中で不断に自己が組みかえられる動きの方向性であり、自分や他人が認める自らのイメージから自由でありつづけようとする動きが、死してなお他者によって感じとられ、他者のうちによみがえるときに立ち現れるものである。（117字）
Schip採点 6点 （下記を参照のこと）	

	採点基準	該当箇所	配点
傍線部	「この秘められた、可能性の自分」についての説明	不断に自己が組み替えられる	2点
	「虚への志向性としての自分の方向性」についての説明	自分や他人が認める自らのイメージから自由でありつづけようとする動き	2点
本文全体	自分らしさの生成には、無意識に過去の自分を統合していることが前提となっていること（意味段落1）	（記載なし）	0点
	自分らしさは他者によって引き出される（意味段落2）	他者との応答の中で	2点

	採点基準	該当箇所	配点
	自分らしさが他者から引き出されて現象するのは、生前死後を問わないということ（意味段落4）	死してなお他者によって感じとられ	2点
論理構成	「でもある」についての説明（自分らしさが現象するのは、他者から引き出されるか、虚への志向性の2択であるということ（本文全体を踏まえてのもっとも重要な論理的骨子））	（「他者のうちによみがえるときに立ち現れるものである」では、「でもある」の論理をつかめていない）	-2点
表現点	（字数制限以外、通常傍線部に準じる）	読みやすく、簡潔である。	1点

E社

答案	<p>他人に認められることによって死後でさえも成立する働きを生む可能性を有する、現在生成している自分を背景としてその可能性を自覚することが、どれだけ自由に現在の自分を否定できるか、すなわち、自分らしさという生成の運動を貫く特徴でもあるということ。</p> <p>（120字）</p>
Schip採点	3点 （下記を参照のこと）

	採点基準	該当箇所	配点
傍線部	「この秘められた、可能性の自分」についての説明	（記載なし）	0点
	「虚への志向性としての自分の方向性」についての説明	どれだけ自由に現在の自分を否定できるか	2点
本文全体	自分らしさの生成には、無意識に過去の自分を統合していることが前提となっていること（意味段落1）	（記載なし）	0点
	自分らしさは他者によって引き出される（意味段落2）	他人によって認められることで成立する	2点
	自分らしさが他者から引き出されて現象するのは、生前死後を問わないということ（意味段落4）	自らの死後でさえも	2点
論理構成	「でもある」についての説明（自分らしさが現象するのは、他者から引き出されるか、虚への志向性の2択であるということ（本文全体を踏まえてのもっとも重要な論理的骨子））	（可能性の自覚＝虚への志向性であるということは傍線部の趣旨ではない。）	-2点

	採点基準	該当箇所	配点
表現点	(字数制限以外、通常傍線部に準じる)	(「すなわち」を使っている余裕などはないはずである。また、前半で「自覚すること」に掛かっている修飾語が長すぎる。)	-1点

F社

答案	生成しつつある運動の中にのみ自分が存在し、そこに自分らしさが現れるとすれば、自分自身にも未知である自己の生の可能性を追求することは、自分や他人が抱いている固定的な自己のイメージを脱し、新たな自己の生成を目指して果敢に生きることだということ。 (120字)
Schip採点	2点 (下記を参照のこと)

	採点基準	該当箇所	配点
傍線部	「この秘められた、可能性の自分」についての説明	生成しつつある運動の中にのみ自分が存在	2点
	「虚への志向性としての自分の方向性」についての説明	自分や他人が抱いている固定的な自己のイメージを脱し	2点
本文全体	自分らしさの生成には、無意識に過去の自分を統合していることが前提となっていること(意味段落1)	(記載なし)	0点
	自分らしさは他者によって引き出される(意味段落2)	(記載なし)	0点
	自分らしさが他者から引き出されて現象するのは、生前死後を問わないということ(意味段落4)	(記載なし)	0点
論理構成	「でもある」についての説明(自分らしさが現象するのは、他者から引き出されるか、虚への志向性の2択であるということ(本文全体を踏まえてのもっとも重要な論理的骨子))	(全体の論理構成が、可能性の追求＝虚への志向性ということになっているが、これでは、他者によって可能性が引き出されることが表現できていない。)	-2点
表現点	(字数制限以外、通常傍線部に準じる)		0点

※他社解答例の採点結果(漢字書き取り問題は除く：最高点は32点)

	A社	B社	C社	D社	E社	F社
設問1	5点	5点	3点	4点	1点	4点

	A社	B社	C社	D社	E社	F社
設問 2	4点	4点	4点	3点	2点	5点
設問 3	4点	4点	4点	4点	3点	4点
設問 4	3点	2点	2点	1点	3点	5点
設問 5	10点	9点	10点	6点	3点	2点
合計	26点	24点	23点	18点	12点	20点
得点率 (%)	81%	75%	72%	56%	38%	63%

最後に

以上のように各社の模範回答を見てきたが、模範回答が十分信頼に足るものではないことが理解できたのではないだろうか？

それはもちろん我々の回答についても言えることである。回答は常に暫定的なものである。大事なことは、自らが納得した回答を作ることである。その際には、文章中にしっかりと根拠を見つけ出すことを忘れないようにしよう。

文章をどのように読み解くか、書いてあることをどう解釈するかは、人によって差が出る。実際に、我々が回答を作る際にも解釈で揺れた箇所も沢山ある。しかしながら、一人一人の勝手な判断や思い込みを極力避けるために、与えられた文章を丹念に読み込んだ上での解釈である。

解釈の多様性は保証されるべきであるが、その解釈は共通の基盤あってこそその一人一人の解釈である。

しかしながらそのような訓練を学校ではあまり受けていないであろうから、この解説を案内としつつ、もう一度現場に立ち返ってほしい。

そして現場からくみとれるものをきちんとくみ取る訓練をすれば確実に回答作成力は上がると思われる。

やみくもに演習するのではなく、問題に徹底的に向き合って自分で納得した回答を作るように心がけてほしい。

その際には、議論することも大事である。議論することによって、このような解釈もありうるのではないか、これはこう読むのがだろうかのではないかというように、テキストの多様な側面が見えてくる。自分では思いもよらなかった解釈に出会

うこともある。現代文の回答を議論することはあまりないかもしれないが、これはかなり学びになる。そして何よりも楽しい。是非一度、自分の回答をみんなで議論してみてほしい。学ぶこと、頭を使うことで最も重要なことは楽しむことである。勉強は楽しみながらするのが一番である。

模範回答があてにならないことは、既に分かったのだから、我々の回答も疑いつつ、さらによい答案を皆さんが書いてくれることを楽しみにしている。もし自信のある答案がかけたならばぜひ教えてほしい。

このAnchorが皆さんのフィードバックによって、より良いものに更新されて行くことを期待して、終わりとする。

引用文献・著作権表示

本PDFファイルの著作権及び著作者人格権は、全て任意団体Schipに帰属します。

無許可での本PDFファイルの複製と再配布は、これらを全て禁じます。

他社解答例の講評欄で言及している解答例は以下の出典より引用しております。

- ・ 『2017年版大学入試シリーズ東京大学（文科）』 教学社編集部・編 2016年
- ・ 『難関校過去問シリーズ 東大の現代文25カ年〔第8版〕』 桑原聡・編著 2016年
- ・ 『大学入試完全対策シリーズ 2017・駿台 東京大学〔文科〕 前期日程(上) 2016～2012/5か年』 駿台予備学校・編 2016年
- ・ 河合塾（総合教育機関・予備校） / 2015年度国公立大二次試験・私立大入試解答速報 <http://kaisoku.kawai-juku.ac.jp/nyushi/honshi/15/t01.html>（閲覧日：2017年2月18日）
- ・ 大学入試問題過去問データベース produced by 東進 <http://220.213.237.148/univsrch/ex/menu/index.html>（閲覧日：2017年2月18日）
- ・ 代々木ゼミナール（予備校） | 東京大学 前期日程の入試問題と解答例（2015年解答速報） http://sokuho.yozemi.ac.jp/mondaitokaitou/todai/kaitou/kaitou/1222284_1814.html（閲覧日：2017年2月18日）
- ・ 東京大学 教育学部の無料受験過去問/入試問題集【スタディサプリ】 <https://studysapuri.jp/SC000073/kakomon/000000000000132501>（閲覧日：2017年2月18日）